

北大史学会会報

史 筵 17

2019.11.20

彙 報

◎ 二〇一九年度大会（二〇一九年七月二〇日）

【研究報告】

吉田 拓矢「日本古代における日蝕―予報に関する検証を中心に―」

野口飛香留「中世後期における陰陽師と禪僧」

安酸 香織「18世紀ウィーンとヴェルサイユ両宮廷におけるシユト

ラーズブルク司教」

【講 演】

宇山 智彦（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

「中央アジア近現代史から見る比較帝国論―協力／抵抗論の脱  
ドグマ化のために―」

追塩 千尋（北海学園大学）

「聖徳太子（574～622、異説あり）信仰研究の課題」

◎ 二〇一九年度総会（二〇一九年七月二〇日）

総会にて北大史学会の委員・会計監査が以下の通り選出された。

〔委 員〕 大田敬子・白木沢旭児・橋本雄・井上敬介・砂田徹・

高瀬克範・野口飛香留・高橋稜央・清水康宏・筒井彦  
七郎

〔会計監査〕 松嶋明男

次に二〇一八年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認された。

I. 取 入

前年度繰越金

八八八、一一一円

二〇一八年度取入

四一〇、七三二円

（内訳）

会費

三八八、〇〇〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

抜刷代立替返却分

九、七二〇円

会誌販売代金

八、〇〇〇円

銀行口座利息

二円

合計

一、二九八、八三三円

II. 支 出

二〇一八年度支出

三二九、二四二円

（内訳）

『北大史学』五八号・『史筵』一六号出版費用

二九五、九二〇円

（印刷代（含・抜刷代）および振込手数料）

二、〇〇〇円

郵送費

二、八九八円

（『北大史学』発送、ゲラ発送、抜刷発送）

一、三九〇円

事務費用（封筒、ノート、領収書、のり）

二、〇九〇円

交通費

三〇二円

（『北大史学』発送…中央局へのタクシー代）

三〇二円

振替用紙印字サービス代

三〇二円

ホームページ・ネットレンタルサーバ代金 六、六四二円  
次年度繰越金 九六九、五九一円

合計 一、二九八、八三三円

害事件の真相―

【コメント】

大西 信之（中央大学杉並高等学校）

◎ 二〇一八年度卒業論文・修士論文発表会

（二〇一九年二月二八日）

【卒業論文発表】

大森 進一「平安時代における牧の経営」

三浦 一将「満洲国の国家構造」

白川部慶太「三藩の乱と清初地域社会」

林原久瑠美「20世紀イギリスの女性解放とサーヴァント」

遠藤 麟「北大植民学関係者と移住民」

【修士論文発表】

工藤 正智「藩と関所」

若槻 稜磨「1970～80年代イングランドサッカー史考―ローカ

ルクラブの持続性に着目して―」

◎ 月例研究会

特別例会・国際シンポジウム「濟州島をめぐる

東アジア海域交流史」（二〇一九年七月二五日）

【講演】

金 善民（韓国・淑明大校）「濟州島と古代の日本」

山内 晋次（神戸女子大）「対馬島・濟州島のミカンと女真の馬―

中華としての高麗―」

藤田 明良（天理大）「ユーラシア東部の『盜賊島』―琉球王子殺

【日本史学研究室】

●博士論文

上田 哲司「十六～十八世紀における北日本の境界領域とアイヌ社

会」

高島 廉「室町時代における政治秩序の形成と顕密・禪宗寺院の

歴史的位置」

宮本 花恵「近世浄土宗と蝦夷地」

●修士論文

工藤 正智「藩と関所」

富永 智希「幕末維新期の江川農兵」

中村 有希「日中戦争・太平洋戦争期の煙草専売制度」

前田 康貴「北海道・樺太間航路と地域経済」

吉田 拓矢「日本古代における日蝕」

●学士論文

大橋 修也「日本古代における天皇の喪葬儀礼について」

大森 雄一「平安時代における牧の経営」

小山内森律「宝暦度朝鮮通信使と日朝交渉の実態」

小畑 皓恭「日本古代における固関について」

亀田 侑美「内海船と大坂市場」

菊地 良介「中世における音楽官司別当職の機能と役割について」

清永 寛人「頼山陽来遊以後の近世における耶馬溪」

佐々木夢乃「近世和歌山城下町における非人身分」  
佐藤 匠「千歳線別線線増と札幌市地区改良による物流構造の変  
化」

新藤 将太「神戸事件と開国和親」

鈴木 良昌「近代日本の海軍大学校と将校団」

高杉 太郎「尾崎秀実の中国論」

高橋 典宏「昭和戦中期の軍事援護事業」

蓼内 稀一「近衛内閣と第一次声明」

西島裕之介「平城天皇の研究」

新田 あゆ「白虹事件と新聞」

細井 史「本多勝一 の思想的立場」

三浦 一将「満洲国の国家構造」

森 奎介「永禄年間末期における上杉氏・武田氏間和平調停」

森 隼人「在朝日本人の生活」

山本 広大「ソ連参戦時における日本人の対ソ観」

吉田 朋生「天明朝の松前藩財政と場所請負制の転換」

### 【東洋史学研究室】

#### ● 学士論文

神田 泰輝「雍正年間清朝地方官の日本対策」

白川部慶太「三藩の乱と清初地域社会」

西川 達「ムスリム同胞団の国家論の変遷―バンナーとフダイ  
ビーの思想比較から―」

西嶋 尚義「一世紀アンタルスに於ける民族と学問の分類―サー  
イド・アル＝アンダルスィー (d.1070) の著作から―」

蒔苗 佳織「一世紀前半カスピ海におけるロシア・イラン貿易」

町田 太志「五胡北朝期胡族政権における漢族有力者の擡頭」

松本啓太郎「蒙疆政権」の教育政策」  
頼岡 稔「九世紀アッバース朝におけるグラームの忠誠と離反」

### 【西洋史学研究室】

#### ● 博士論文

鈴木 山海「1654年「帝国宮内法院令」をめぐる諸問題」

安酸 香織「近世アルザスをめぐる権力秩序―神聖ローマ皇帝・フ  
ランス王・帝国等族―」

#### ● 修士論文

若槻 稜磨「1970―80年代イングランドサッカー史再考―ロー  
カルクラブの持続性に着目して―」

土居奈津美「古代ローマにおける円形闘技場に関する考察―共和政  
から帝政への移行に伴う役割の変化について―」

牧口健太郎「ネルウァの皇帝位継承と再評価―国庫・近衛隊・元老  
院議員の役割―」

浅沼 航「14世紀ドイツの鞭打苦行運動と民衆の信仰」

笹井 泰宏「16、17世紀におけるミュンスターの宗派併存」

辻 ゆり「19世紀パリの人々は音楽をどう聴いたか」

#### ● 学士論文

黒川 智矢「エジプト属州の成立」

川上 雄大「ドムス・アウレア (黄金宮) 建築からみるネロ帝像の  
再検討」

下館 洋輔「スターリン期ウクライナにおける民族政策と民族主  
義」

木藤 綾佳「スペイン・トレドにおけるアルフォンソ6世の統治政  
策」

沼尾 汐里「戦後英国の人種主義とパウエリズム」

林原久瑠実「20世紀イギリスの女性解放とサーヴァント」  
松本 一也「20世紀転換期におけるダンディー・ジュート産業衰退  
の考察」

旦尾 尚功「中世南フランスにおけるカタリ派の共同体」

畑島 由依「三十年戦争とハンブルク」

鈴木 亮佑「ドイツ国王ハインリヒ7世の王国統治」

清水 康宏「1640年のカタリーニャ反乱」

#### 【歴史文化論講座】

● 学士論文（歴史学分野のみ）

遠藤 麟「北大植民学関係者と移植民―拓殖計画とブラジル移民  
に着目して―」

相武 大輝「戦時期の経済倶楽部―経済倶楽部の役割とその具体的  
な講演内容を中心に―」

玉置 志乃「東亜新秩序と日米関係」

#### 【北方文化論講座】

● 博士論文（考古学分野のみ）

今泉 和也「古典期前期マヤにおける国家形成の研究―三足円筒土  
器と「テオティワカンの影響」―」

● 学士論文（考古学分野のみ）

龍田 桃子「土器型式分布域の拡大・縮小について―北海道石狩低  
地帯及び周辺における縄文期前半を対象として―」

（考古学）

安井 あい「縄文文化の土偶造形研究におけるジェンダー観につい  
て」

### ◎ 研究室便り

#### ＜日本史学研究室＞

大学学事暦の今年度から、改組に伴って文学研究科日本史学講座  
から文学院歴史学講座日本史学研究室に名称が変更されました。併  
せて、旧歴史文化論講座から権錫永先生をお迎えするとともに、権  
先生の指導学生（院生および学部学生）も日本史学研究室の一員と  
なりました。また、今年度後期より、サバティカル研修から谷本見  
久先生が復帰され、現在、教員合計7名の体制で研究・教育にあ  
たっています。事務補助員の川本愛さんにも、ひきつづき研究室運  
営にご尽力いただいています。

また、今年度前期（四月～八月）には、客員研究員として金善民  
先生（淑明女子大学校）をお迎えし、北大史学会特別例会・国際シ  
ンポジウム「濟州島をめぐる東アジア海域交流史」（七月二五日開  
催。当研究室も主催の一角を占める）にご登壇いただきました。な  
お、シンポの内容詳細は、北大史学会ウェブサイト（「月例研究  
会」）をご覧ください。

学生諸君の構成は、博士課程二名・修士課程二名・学部学生  
四八名、です。相変わらずの大大所帯で、大変賑やかに、かつ切磋琢  
磨しながら学業に励んでいる様子が随処で見受けられます。このな  
から、新たな研究が生み出されていくことでしょう。

学部二年生による恒例の研修旅行、今年度は川口暁弘先生の引率  
で、東京を巡りました（九月一七日～二〇日）。国会図書館憲政資  
料室や東京大学史料編纂所など、普段決して入ることの出来ない場  
所を見学しました。出発日に一人遅刻するという珍事がありました  
が、その外は至って順調でした。

各時代のゼミや自主ゼミも、それぞれ活発に動いています。

古代史では、昨年に続き今年も、大学院のゼミで一〇月末に奈良の見学旅行を実施しました。正倉院展・平城宮跡資料館などを見学致しました。

近世史では、九月一七―一九日に恒例の近世史ゼミ夏合宿を実施しました。今年度は、東北大学佐藤大介ゼミと合同で、宮城県丸森町の修験寺院・宗畔院の調査を行ない、クナシリ・エトロフ関連文書に触れることが叶いました。

近代史では、川口・権・白木沢院ゼミの合同夏合宿が定山溪で実施されました。

そしてこれまた恒例の史料調査合宿は、昨年度に引き続き俱知安風土館にて同町史編さん関係資料を合同で調査し、目録を作成しました(参加一七名)。加えて、北広島エコミュージアムセンターで阿部仁太郎資料を調査し、目録を作成しました(参加一〇名)。

昨年度学窓を巣立たれた皆さんは、博士三名、修士五名、学生二二名でした。それぞれ各方面での活躍を祈念するとともに、今年度輩出した三名の課程博士は、さらに研鑽を進め飛躍していつていただきたいと願します。(文責 橋本 雄)

### 〈東洋史学研究室〉

本年四月の改組を経て、本研究室は文学院人文専攻歴史学講座東洋史学研究室(文学部人文科学歴史学・人類学コース東洋史学研究室)となり、慣れ親しんだ東洋史学講座の名称は消失した。

本年九月現在、東洋史学研究室は、教員三名、専門研究員一名、大学院・博士課程一名、修士課程二年生三名、一年生五名、学部・四年生七名、三年生七名、二年生五名の計三十二名で構成されている。昨年度、文学部学生については、研究室の教員を指導教員とする卒業論文が計八本提出された。研究室のにぎやかさが、今後も続

くことを願う。

博士課程への進学者がいないため、「史朋」は五〇号をもって休刊状態のままであるが、談話会そのものは活発に開催されている。

『史朋』休刊にともない、研究室の情報の発信はホームページが主な場となったが、談話会の情報も含め、その内容はかつてないほど充実しているのので、OB・OGの皆さんには是非一度ご覧いただきたい。

この一年間の研究室の出来事は以下の通り。

まず、今回の改組にもなつて太田敬子氏が研究室に加わったことを、うれしいニュースとして報告する。今後、佐藤健太郎氏と地中海世界の東と西を分担していただくことで、研究室の特長となる研究領域の存在が、国内外の学術界にアピールできるようになるであろう。早速九月には、佐藤氏がモロッコから恩師のムハンマド・アフイーフ氏(ムハンマド五世大学元教授)を本学のサマインステイテュートに招聘し、「アラブ近現代史」と題して行なわれた集中講義には研究室内外の多くの院生・学生たちが参加した。

このほか、長年にわたつて院生・専門研究員として研究室を支えてくれた宮崎聖明氏が、本年四月、別府大学文学部史学文化財学科に准教授として着任したことを、もう一つのうれしいニュースとして報告する。これまでの研究室への様々な貢献に対し、心から感謝したい。

なお、すでに恒例行事となった感のある昨年一〇月の北大駅伝では、佐藤監督の下、研究室から二チームが参加し、OBからも森本一夫・長峰博之氏が参加して軽快な走りを見せ、今野毅氏がはるばる応援に駆けつけた。また、二月恒例の「追いコン」は、洞爺湖温泉にて開催し、盛会であった。(執筆担当 吉開)

## 〈西洋史学研究室〉

二〇一九年度を迎え、文学研究科が文学研究院へ改組轉換されたことに伴い、西洋史学講座も西洋史学研究室となりました。この改組では、文学研究科の各セクションの名前が変わっただけでなく、様々な実質的な変化がありました。

今回、西洋史学講座は、歴史文化論講座からアメリカ現代史を専門とする村田勝幸先生に加わっていただき、新たに西洋史学研究室を發足させることとなりました。村田先生とは、これまで同じ歴史系の教員として一緒に仕事をさせていただく機会が多々ありましたが、これからは同じ研究室のメンバーとして、肩を並べて働いていくこととなります。アメリカ現代史という従来の西洋史学講座には欠けていたフィールドにおいて、村田先生という優れた人材を得ることにより、再び教員五名という充実した研究室の体制を取れたことは、皆の喜びとなりました。また、これまでも村田先生には、講座の壁を越えてアメリカ史や現代史の学生を指導していただいております。今後は同じ研究室となりますので、より日常的に緊密な学生指導をしていただきたいと思いますし、これまで村田先生の指導下にあった歴史文化論講座のアメリカ史の学生諸君も、同様に西洋史学研究室に所属することとなりましたので、当該分野の学生たちにとっては親しく切磋琢磨する学友が増えて、とてもやりがいがあり喜ばしいことと思われまます。

さて、本年度の西洋史学研究室の体制をご紹介します。五名の教員は、研究室主任の砂田徹先生（古代ローマ史）、研究院長・学部長職も最終年度となりました山本文彦先生（ドイツ中世近世史）、長谷川貴彦先生（イギリス近現代史・歴史理論）、村田勝幸先生（アメリカ現代史）、松島（フランス近現代史）となっております。松島は本年度から教授に昇格し、さらに本年度の後期はサバティカ

ル（研究休暇）をいただくことになりました。本年度が改組轉換の初年度ということもあり、諸々の事情からお休みをいただく後期の大学院科目を全て前期に開講することになりました。さらに改組に伴い新設された大学院のオムニバス講義も担当し、全学科目も二コマ担当の年で、それら諸々が全て重なった前期のある週は、九コマ開講という異例の状況になりました。結果、サバティカルに胸を高鳴らせる前に、前期末には授業準備の負担で燃え尽きてらしからぬ手抜かりが増え、色々心配ご迷惑をおかけしました。

続いて、学生諸君の構成については、研究員は専門研究員が四名、専門研究員を終えて共同研究員となった者が一名です。大学院生は博士課程後期に二名、修士課程に九名が所属します。学部生は卒業論文作成年度の者が二十二名、三年生が十二名様、二年生が十六名となっております。例年通り、就職事情等を反映して、博士課程後期が少なく、修士以下が厚い構成となっております。博士課程後期進学者を増やすよう、努めてまいりたいと思っております。 （文責 松島）

## 〈北方文化論講座〉

二〇一八年度の北方文化論講座（考古学、文化人類学、博物館学、民族言語学）の構成メンバーは、教員三名、博士後期課程十名、修士課程二名、学部生一六名の、計四一名です。

考古学分野では、夏季の野外実習として毎年恒例の豊浦町礼文華遺跡発掘調査（第八回）を実施しました（二〇一九年八月二三日、九月五日）。今年は、イルカや魚を解体した場所と考えられる場所が発見され、また遺跡の北側への広がりに関する詳しい情報を得ることができました。この間、例年どおり全学教育「フィールド体験型プログラム」の一環として北大の一年生六名を受け入れるとともに

に（八月二八日）八月三〇日）、現地説明会（九月一日）、礼文華小  
学校児童の体験発掘（九月二日）を実施しました。昨年は、胆振東  
部地震のため一年生対象の集中授業を中止しましたが、今年は通常  
の実習に引き続き一般教育演習（フレッシュユマンセミナー）を無事  
に終了することができました（一年生一五名・九月八日）九月一三  
日）。今年も多大なご支援を頂いた豊浦町教育委員会・豊浦町役  
場・豊浦町郷土研究会・礼文華地区の方々に、あつく御礼申し上げ  
ます。

小杉教授は、研究活動として「縄文文化『続縄文期』における海  
獣狩猟集落の研究（科研基盤C）を継続して行い、調査期間中には  
上記実習生の受け入れも行いました（八）九月・豊浦町）。また、  
奄美での民俗誌考古学の調査も継続して実施しました（三月・奄美  
大島・喜界島）。学内での埋蔵文化財調査センターの運営、北大歴  
史的資産活用TF委員、学外での史跡垣ノ島遺跡保存整備検討委員  
会（函館市）、北海道文化財保護審議会（北海道）、開拓使本庁舎跡  
等史跡の保存活用に関する有識者懇談会（北海道）、星葉峠黒曜石  
原産地遺跡調査指導委員会（長野県長和町）などを通じて、史跡の  
整備・活用や文化財保護への見識を広げることができました。この  
ほか、放送大学公開講座セレクション「縄文文化からのメッセージ  
―北日本の考古学―」の収録・放映、インタビュを受けたドキュ  
メンタリー映画『縄文にハマる人々』の公開上映、関連した講演会  
として千歳市で『キウス周堤墓群と縄文にハマる人々』を行いまし  
た。

高瀬准教授は、サハリン郷土博物館およびワシントン大学に保管  
されている千島列島出土考古資料を調査したほか、ヤクトックから  
新石器時代を専門とするピクトル・ジャコノフ氏を招聘し、東大・  
北大で共同研究・講演会を実施しました。また、二〇一九年六）八

月までトロント大学の博士課程院生エマ・ヤスイ氏を日本学術振興  
会サマープログラムの研究者として招へいし、北海道の縄文石器の  
残存デンブン分析を共同で実施しました。教育面では、トロント大  
学のゲーリー・クロフォード教授とともに、北海道における長期的  
資源利用に光を当てた共同授業（サテライトスクール）の試みをは  
じめています。今後、カナダでも北大の学生を対象とした同様の授  
業（ラーニングサテライト）も計画しており、研究面のみならず教  
育面でさらなる交流の進展が期待されます。

今年の考古学分野の卒業・修了生は、学部生が二名、博士が一名  
でした。とくに今泉和也氏は久しぶりの考古学分野からの博士学位  
取得者となります。今後のますますの活躍を期待します。二〇一九  
年四月、北方文化論講座は「考古学研究室」と「博物館学研究室」  
としてそれぞれ再出発を果たしました。したがって、北方文化論講  
座のなかの考古学分野として研究室の動向を報告するのは、今年が  
最後となります。来年は、歴史学講座のなかの考古学研究室とし  
て、少しでも明るいニュースが届けられることができたらと願っていま  
す。

（文責 高瀬）

## 北大史学会からのお願い

当会の財政状況改善と業務迅速化のために、大会・例会などの御案内を、ハガキからEメールに切り替えます。ご協力いただける方は、

### 件名

メールアドレス登録・お名前

(例) メールアドレス登録・北大太郎

### 本文

①お名前・ふりがな

(例) 北大太郎・ほくだいたろう

②住所 (郵便番号、番地は半角数字)

(例) 〒060-0810 北海道札幌市4-5-2202

③電話番号 (半角数字、ハイフン)

(例) 011-706-xxxx

④専門分野

(例) 中国古代史

を明記のうえ、左記アドレスまでEメールをお送り下さい。順次、Eメール連絡に切り替えて参ります。何卒ご理解とご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

[hokudaisihigaku@gmail.com](mailto:hokudaisihigaku@gmail.com)